

柳沢

宮沢賢治

青空文庫

林は夜の空気の底のすさまじい藻もの群落だ。みんなだまって急いでゐる。早く通り抜けようとしてゐる。

俄にはかに空がはつきり開け星がいっぱい耀きらめき出した。たゞその空のところどころ中風にでもかかったらしく変よどに淀んで暗いのは幾片か雲が浮んでゐるのにちがひない。

その静かな微光の下から烈はげしく犬が啼なき出した。

けれども家の前を通るときは犬は裏手の方へ逃げて微かすかにうなつてゐるのだ。

一ちよつと寸来ない間に社務所の向ひに立派な宿ができた。ランプが

黄いろにとぼつてゐる。社務所ではもう戸を閉めた。

（こんや、二時まで泊めて下さい。四人です。たいまつがありませんか。わらぢがありますか。それから何かよるのたべものがありますか。ほう、火がよく燃えてるな。そいぢや、よござんすか。入りますよ。）

（さあ、二時までぐつすりやるんだぜ。ねむらないとあしたつかれるぞ。はてな、となりへ誰か来てるな。さうだ、土間に測量の器械なんかが置いてあつた。）

青いきらびやかなねむりのもやが早くもぼんやりかゝるのに誰かどしどし梯子はしごをふんでやって来る。隣りの室へやをどんと明ける。

「やあ旦那さん。ぶん葡萄酒一杯やりなさい。」

「葡萄酒？ 葡萄酒かい。お前がつくつた葡萄酒かい。熱めてあるのかい。」

「まあ一杯おあがりなさい。さうです。アルコールを入れたのです。」

「アルコールを入れたのか。あとで？ 作つてから？」

「さうです。大丈夫ですよ。本当のアルコールです。見坊獣医から分けて貰つたのであります。」

「どうして拵へたんだい。野葡萄酒を絞つてそれから？」

「いゝえ、あとで絞るのです。まあ、おあがりなさい。大丈夫であります。」

「さうか。そんなら貰はうか。おっと、沢山だよ。ふん、随分入れたな、アルコールを。」

「ずるぶん瓶^{びん}を沢山はじけらせました。」

「ふん。」

「砂糖を入れないでもやつぱり醸^わきます。」

「さうかい。砂糖を入れたら罰金だらう。おい、吉田、吉田。吉田を呼んで来て呉^くれ、あ、いゝよ、来た来た。おい吉田。葡萄酒ださうだ。飲まないか。」

「さうですか。おや。熱くしてあるのか。どれ、おい沢山だ。渋いな。」

ねむけのもやがまた光る。

「あしたは騎兵が実弾射撃に来るさうぢやないか。どこへ射つのだらう。」

「笹森山、地図を拝見、これです。なあに私等の方は危くありませんよ。」

「しかし弾丸が外れたら困るぜ。」

「なあに、旦那さん。そんなに来ません。そいつさ騎兵だんすぢやい。」

ふん、あいつはあの首に鬱金を巻きつけた旭川の兵隊上りだな、騎兵だから射的はまづい、それだから大丈夫外れ弾丸は来

ない、といふのは変な理窟だ。けれどもしんとしてゐる。みんな少し酔つて感心したんだな。

「今日は君は楽だったらう。」

「えゝ、しかし昨日は鞍掛くらかけでまるで一面の篠笹しのざさ、とても這はふもよぢるもできませんでした。」

「いや、おれの方だつてさうだ。さあ寝るかな。あしたは天気は大丈夫だな。四つまでできるかな。」

「えゝ。」

「やつ、お邪魔しあんした。まだ入つて居をります。置いて行きま
す。」

「おい、持って行け、持って行け、もう飲まんぞ。」

さうだ。帝室林野局の人たちだ。

たしかにこれは夢のはじめの方の青ぐろい空だ。山の中腹から
裾野すそのに低く雲が垂れ、その星明りの雲の原の上でごろごろと雷が
鳴つてゐる。実に静になつてゐる。夢の中の雷がごろごろ
ごろうなつてゐる。雲の下の柏かしはの木立に時々冷たい雨の灌そそぐのが
手に取るやうだ。それでもやはり夢らしい。

何時かな。もう二時半だ。少しおくれた。いや、丁度いゝ。寒
い。

(おい。もう二時半だ。二時半だ。行かう行かう。) 寒くてガタガタする。みんなうらうら仕度をしてゐる。ゆふべのつゞきの灰色ズツクの靴かばん、ラムプの光は青い孔雀くじやくの羽。

(いゝか。火がついたか。さあ出よう。たいまつはまん中だぞ。寒いな。)

空の鋼は奇麗に拭ぬぐはれ気圏ふちの淵あをくろは青黝あをくろぐると澄みわたり一つの微塵みぢんも置いてない。

いっぱいいっぱいの星がべつべつに瞬瞬いてゐる。オリオンがもう高たかくのぼつてゐる。

(どうだ。たいまつは立派りっぺいだらう。松の木に映るとすごいだらう。そして、そうら、裾野すそと山が開けたぞ。はてな、山のてっぺんが

何だか白光するやうだ。何か非常にもの凄^{すご}い。雲かもしれない。おい、たいまつを一寸^{ちよつと}うしろへかくして見る。ホウ、雪だ、雪だ。雪だよ。雪が降つたのだ。やっぱりさつき雨が来たのだ。夢で見たのだ。雪だよ。）

空気はいまはすきとほり小さな鋭いかけらでできてゐる。その小さな小さなかけらが互にひどくぶつつかり合ひ、この燐^{りんくわう}光をつくるのだ。

オリオンその他の星座が送るほのあかり、中にすつくと雪をいたゞく山^{せんわう}王が立ち黒い大地をひきめるながら今涯^{はて}もない空間を静にめぐり過ぎるのだ。さあみんな、祈るのだぞ、まっすぐに立て。

(無上甚深微妙法 百千万劫難遭遇)

我今見聞得受持 願解如来第一義

力いっぱい声かぎり、夜風はいのりを運び去りはるかにはるか
にオホツクの黒い波間を越えて行く。草はもうみんな枯れたら
しい。たいまつの火の粉は赤く散り、大熊星おほぐまほしは見えません。

(こここのところでよく間違ふぞ。左を行くと山みちなんだ。鳥居
があるので悪くするとそつちへ行くぜ。) みちは俄にはかに細くなつた
り何本にもわかれたり。黒い火山礫くわざんれきと草のしづく。

(いつもなら火を見て馬がかけて来るんだが今はもうみんな居な
いんだ。すつかり曇つたな。)

みちが消えたり又ひよいと出て来て何本にも岐わかれたり。

かしは
 柏の枯れ葉がざらざら鳴つてゐる。

なんだか路みちが少しをかしい。もう大分来てゐるのだが。

(向ふにどてがあるかどうか一ちよつと寸見て来よう。おい。ついて来るな。そこに居ろ。何だ。たいまつが消えたな。そこに居ろよ。はなれるな。ずるぶん丈の高い草だ。胸きりある。)

(どてが無いよ。この路に沿つてゐる筈はずなんだ。事によつたら間違つたぞ。もう少し行つて見よう。けれども駄だ目だ。やつぱり駄目だ。こんな変な坂路がなかつた筈だ。少し北側へ廻つたのかな。すつかり曇つたし、困つたな。仕方ない夜明までけ迄に一ぺん宿へ引

つ返し日が出てから改めて出掛けよう。）

（けれども一寸路をさがして来よう。何とか抜けられるかも知れない。曇ってさへ居なかつたら見当だけつけてぐんぐん本当のみのちの方へ草をこいで行けばいゝんだが。仕方ない。ますます変な所へ来てしまった。やつぱり駄目だ。さあ引つ返しだぞ、戻りだぞ。やあ、降って来た降って来た。マントのあるのは誰々だ。さあ馳かけるんだぜ。いゝか。そら。大きな岩だ。つまづくな。）

（ふん、あれがさつきかの柳沢の杉だ。）

何だ沼森の坊主め。ケロリとして睡ねむってやがる。）

所々雲が切れて星が新らしく瞬く。

（ははあ。こゝだ。こゝで間違つたんだ。仕方ない。まあ行つて火をたかう。）

山だけまだ雲をかぶつてゐる。

（おい。上等のお菓子だぜ。一つづつ分けるぞ。もうぢきだ。もう十五分。）しかし宿でも迷惑だな。

（路を間違へて歸つて来ました。火をたきますよ。みんなきものを乾かせ。辛いな。けむりが。）辛い。けむり。それにきものが乾かない。烟けむりがみんなそつちへばかり行く。ぱつと燃えろ。さあ、ぱつと燃えろ。

（ああ、もう明るくなつて来た。空が明るくなつて来た。きれい

だなあ。おい。）

深い鋼青から柔らかな桔梗ききやう、それからうるはしい天の瑠璃るり、それからけむりに目を瞑つぶるとな、やはりはがねの空が眼めの前一面にこめてその中になるりいろのくの字が沢山沢山光つてうごいてゐるよ。くの字が光つてうご……。

もうすっかり暁だ。

（お握りを焼かう。はあ、ゆふべはどうも。途中で迷つて。雨は降るし。）

（さあ日が出たやうだ。行かう行かう。さあ飛び出すんだよ。お

ゝ、立派、この立派。ふう。）

日の光は琥珀こはくの波。新らしく置かれたみねの雪。赤々燃える谷のいろ。黄葉をふるはす白樺しらかばの木。苔モツスアゲート瑪瑙。

（おゝい。あんまり馳かけるな。とまれ。とまれえ。おゝい。止れ
たら。待てたら。）

うん。朝の怒りは新鮮だ。炭酸水だ。

鈴蘭すずらんの葉は熟して黄色に枯れその実は兔うさぎの赤めだま。そしてこれは今朝あけ方の菓子すずがみの錫紙。光ってる。

青空文庫情報

底本：「新修宮沢賢治全集 第十四巻」筑摩書房

1980（昭和55）年5月15日初版第1刷発行

1983（昭和58）年1月20日初版第4刷発行

入力：林 幸雄

校正：mayu

2003年1月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>)

で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランティアの皆さんです。

柳沢 宮沢賢治

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>